

2005年1月31日

明治大学経営学部経営学科

2005年度卒業論文

## 「信用金庫の役割」

論文執筆者：後藤 喬

学籍番号：1710010288

指導教員：小関 隆志

# 目次

はじめに

## 1章 信用金庫の現状と成立

- 1節 信用金庫成立の経緯
- 2節 信用金庫の制度的特長
- 3節 信用金庫の現状  
考察

## 2章 信用金庫の発展

- 1節 地域金融機関
- 2節 情報力
- 3節 系統機関  
考察

## 3章 中小企業との取引

考察

## 4章 信用金庫の課題

- 1節 中小企業取引への対応
- 2節 情報の仲介・活用  
考察

おわりに

## はじめに

本論文は、信用金庫の存在意義、地域社会・地域経済における役割に焦点をあてたものである。

本論文を執筆する理由として、就職活動を通じ金融制度改革により新たな方向性に向かっている金融業界に興味を持ったこと。大学のゼミで様々な非営利組織について学び、社会のニーズが多様化している今日において、営利企業のみでは社会のニーズに対応しきることができないということを学び、金融面でもそれは同じであると考え、協同組織という形態で非営利性を持つ信用金庫の重要性を感じたこと。最近、信用金庫の破綻や合併が相次ぎ、そのことに興味を持ったこと。以上の三点によるものである。

地域経済を担う金融機関として、地方銀行、信用組合も考えられるが、地方銀行は営利組織という点で、信用組合は金融機関としての性格が弱く、組合としての性格が強いと感じたため、本論文では取り上げないこととする。

私は今年の3月に大学を卒業し、4月から信用金庫に就職する。現在は内定者という立場にある。昨年から内定者同士の懇親会や研修会などで信用金庫の職員の方や同じ内定者の方と接してきた。そこでは本にはあまり書かれていないことを聞いたりした。そこで得た知識をふまえたうえで、

1章で、信用金庫の成立の原因、背景、現状について。2章で、信用金庫の発展の要因について。3章で、信用金庫の弱みについて。4章で弱みへの対応について。1から4章をふまえて、おわりにで、私の考えを論じることとする。

現在の日本の金融業界は、金融制度改革によって、業務・価格・商品に関する規制が抜本的に自由化されてきている。銀行・証券・保険、さらには都市銀行・信託といった業態は名目化してゆく。以前の護送船団方式から自由化へ変わり、それによる競争が生まれている。銀行では店舗での株式投信や一部の保険購入、証券会社では購入可能な商品の拡大や株式委託手数料の自由化。このように金融業界がお互いの分野に参入できるようになってきている。

加えて外資系金融機関の参入・攻勢などもある。金融業界の中では新たなビジネスチャンスが生まれ、今までよりも競争は激しくなる。このことで企業は顧客の獲得、経営の効率性の向上などの努力が今まで以上に必要とされる。そして競争に負けた企業は破綻、吸収合併されることになる。

また、日本の社会・経済は地方分権・地方財政という政策のもと、地方自治体では「平成の大合併」と言われるように、市・町・村が合併し規模が拡大している。今後は地方分権・地方財政の動きは進んでいくと考えられる。

地域金融機関の役割は、今後、より大きくなっていくことが予想される。

# 1章 信用金庫の歴史と現状

## 1節 信用金庫成立の経緯

明治維新を契機として資本の集中が激化し、農民や中小商工業者が貧窮に陥ったことから、経済的弱者に金融の円滑を図ることを目的に、明治33年(1900年)に産業組合法が制定され、同法による信用組合が誕生した。

しかし、この信用組合は会員以外からの預金が認められないなど、都市部の中小商工業者にとっては制約が多かったため、大正6年(1917年)に産業組合法が一部改正され市街地信用組合が誕生した。そして、昭和18年(1943年)には単独法の市街地信用組合法が制定された。

その後、終戦後の経済民主化の中で、昭和24年(1949年)に中小企業等協同組合法が制定された。しかし、同法は比較的着実に進展してきたそれまでの市街地信用組合への制約を再び強くするものであったことから、業界の内外から協同組織による中小企業者や勤労者のための金融機関の設立を望む声が高まっていった。

昭和26年(1951年)6月15日に信用金庫法が公布・施行され、会員外の預金を扱え<sup>1</sup>、手形割引<sup>2</sup>もできる信用金庫が誕生した。

信用金庫は中小企業や個人を会員<sup>3</sup>とし、相互扶助を目的とする協同組織の金融機関で、非営利目的の法人である。

株式会社組織の営利機関である銀行は、十分に担保力があり、多額の金融取引をする大企業や高所得者を対象に主に取引をする。資本が少ないため信用が低く、担保力も小さく、小額の金融取引しか出来ない中小企業や勤労者は銀行から取引をする際に不利な条件を与えられたり、取引をしてもらえないことがある。このような中から、中小企業や勤労者のような社会的弱者が集まり、金融上の不利を克服し、必要な資金調達を確保し、あるいは適切な貯蓄手段の利用を可能にするために協同組織という形で金融機関を形成したことがはじまりとなっている。

信用金庫法総則第1条(目的)によると

「この法律は、国民大衆のために金融の円滑を図り、その貯蓄の増強に資するため、協同組織による信用金庫の制度を確立し、金融業務の公共性にかんがみ、その監督の適正を期するとともに信用の維持と預金者等の保護に資することを目的とする。」

ここで信用金庫の非営利性が公共性という言葉で表現され、規定されている。

---

<sup>1</sup> 信用金庫法第5章53条1項

<sup>2</sup> 信用金庫法第5章53条3項

<sup>3</sup> 信用金庫法第2章10条

## 2 節 信用金庫の制度的特長

信用金庫の事業は銀行と変わりはない。違う点は協同組織という形態になっている点である。銀行の株主は株式からの配当などの利益を得ることを目的とし、銀行はそれに応えるために利益をだすことを目的とする。一方、信用金庫の場合は出資し会員となることで配当を受けることを直接の目的とせず、信用金庫の事業を利用することを目的としている。そのため運営は会員の利便性などを考えたものになっており、議決権は一人一票<sup>4</sup>で、出資の最高限度も規制<sup>5</sup>されている。これらは公平性を保つための制度である。

## 3 節 信用金庫の現状

都市銀行は、以前は法人取引に力を入れていた。しかし、バブルの影響を受けた企業の倒産や活発ではない設備投資などの流れを受け、法人の中でも大規模な法人を主に相手にしていた都市銀行は、次の新規獲得のターゲットとして力を入れているのが個人との取引である。都市銀行は戦略を変化させ、今まで信用金庫、信用組合が強みをもっていたところに参入することになる。都市銀行の戦略により競争は加速されていった。

信用金庫法施行以来、信用金庫の数は増え発展してきたが、現状ではピーク時に比べその数は減少している。

図 信用金庫の店舗数・会員数の推移 (単位：店舗、人)

年月末	店舗数				会員数
	本店	支店	出張所	合計	
	(信用金庫数)				
1998年11月	399	8,056	227	8,682	8,685,896
1999年11月	392	8,019	237	8,648	8,821,092
2000年11月	380	7,928	267	8,575	8,948,010
2001年11月	364	7,810	269	8,443	9,004,709
2002年11月	331	7,704	268	8,303	8,969,995
2003年11月	314	7,514	265	8,093	9,073,614
2004年11月	301	7,346	270	7,917	9,129,343

(資料) 信金中金総合研究所 『信用金庫統計』をもとに作成

<sup>4</sup> 信用金庫法第2章第12条

<sup>5</sup> 信用金庫法第2章第11条

図 から分かるように、1998年11月から2004年11月までに、本店の数は98店舗の減少が見られる。この減少は合併によるものである。

合併の原因はいくつか考えられるが、時期によって合併の性質は異なっている。

1990年から始まったバブル崩壊と金利の自由化という大きな出来事を背景とし、それによって起こった合併がある。

原因の一つめは、金利の自由化による競争の中で、安定した配当と経営の効率化を目的とした合併がある。二つめは、バブル期に保有していた有価証券がバブルの崩壊により評価損になったこと、不動産担保による貸出が不動産価格の下落により貸し倒れが起こったことにより不良債権と不良資産を抱えてしまい、経営体力が落ちることによる合併。

それから10年以上たっている現在は不良資産や不良債権の問題を解決した、または、ほぼ解決している信用金庫は多い。

最近では、地方分権・地方財政などの権限委譲により、地方自治体では近隣の市町村の合併という現象が起こっている。これにより地域経済が広域化することが原因で信用金庫も合併するパターン、社会的ニーズの多様化による業務の多様化に対応するための合併もある。

信用金庫は地域経済の広域化や業務の多様化によって人材が不足している。だからといって専門の人材を採用するのは難しい。そのために隣接する信用金庫同士が合併し、重なっている地域で、浮いた人材を他の業務に当てるなどして地域経済の広域化、業務の多様化に対応している。

その他にも、信用金庫の系統機関である（社）全国信用金庫協会が合併に前向きな姿勢をとっていることなども信用金庫の合併の原因の一つであると考えられる。

## 考察

信用金庫は中小企業や勤労者などの社会的弱者が集まり、金融面での不利を克服するために設立され、相互扶助の精神により運営されている。全国に信用金庫が設立されていったことを考えると、その必要性は大きいものである。

最近では合併で信用金庫の数は減少の傾向にあるが、一方、会員数は年々増加している。このことは、信用金庫の利用しやすさや必要性を示している。

日本の経済成長とともに信用金庫は発展してきた訳であるが、その発展の要因を2章で述べることにする。

## 2章 信用金庫の発展

### 1節 信用金庫の地域性

信用金庫は活動する地区を定めることが規定されている<sup>6</sup>。信用金庫の会員資格は地区を前提に定められ、地区外へ店舗を設立すること、地区外で事業活動することはできないと解されている。地区に制限はないが、信用金庫法の定款によると、内閣総理大臣の認可によって地区は決まることになっている。信用金庫は地域金融機関として地域経済の円滑化・活性化を期待されており、その機能を十分に発揮できる程度の範囲のものでなければならないとされている。

この地区というものが信用金庫の地域金融機関とであるゆえんである。この地区の中で信用金庫は地域住民が利用しやすいような支店や出張所を配置し、地域集中型の店舗展開を行う。その地区に店舗を網羅し、「面」の事業展開をする。このことで信用金庫側としても地区全体に職員を送り込むことができることとなる。

信用金庫の貸出<sup>7</sup>は会員に対するものである。そしてその会員とは地域の中小企業や個人である。資金を預金という形で回収し、貸出という形で供給する。つまり地域で回収した資金は必ず地域へと還元される。信用金庫は資金の仲介をし、地域経済の中心的役割を果たすことになる。

### 2節 情報力

信用金庫の強みのひとつとして情報力がある。そしてその情報力とは信用金庫の地域集中型の店舗展開によるものである。2章1節で説明したように、信用金庫の場合、地区を設定し、その地区に店舗を網羅し、「面」の事業展開をする。信用金庫の職員が営業で起業や各家庭訪問する。この営業が情報を得るのである。企業や各家庭の金銭的ニーズを得ることが出来る。また信用金庫は地域のメインバンクとなっていることから自治体の指定金融機関となっていることがある。自治体とのつながりを持ち、このことが地域事情を知るためには必要なことである。

信用金庫が情報を得ることができる場として、地域のイベントへの参加や主催などが考えられる。

地域のお祭りに信用金庫職員は手伝いとして参加したり、地域の清掃活動へ参加したりと地域住民や地域企業、自治体関係者と触れ合う。の中で親しみや信頼関係も生まれる。

地域との関わりの中から信頼が生まれ、信頼は信用金庫の強みの一つとなる。信用金庫

---

<sup>6</sup> 信用金庫法第3章23条第2項

<sup>7</sup> 信用金庫法第5章53条第2項

はその地域のメインバンクであり、顧客との長年の付き合いや地域のイベントへの参加、バックアップなど仕事以外でも地域に関わっている。その中で地域住民との人間関係を築き、結果として信頼を得ることになる。

私の知人が次のようなことを言っていた。

「信用金庫に就職した先輩に聞いた話によると、信用金庫の職員であるというだけで、初対面で取引をしていない人に、信用金庫の人なら信用できるから取引をしましょうと言われたことがある。」

この信用金庫の職員は、ある地域を担当し、営業をしていた時に言われたそうで、結果、新規の取引が成立したそうだ。この言葉は信用金庫が地域貢献を果たし、地域住民の人に信頼されていることを示している。この新規獲得の例では、この信用金庫の職員だけの力だけではなく、信用金庫全体での取り組みが評価された結果である。

### 3 節 系統機関

信用金庫は信用金庫同士のつながりや系統機関とのつながりを持つことで、信用金庫業界全体で活動できるシステムがある。系統機関として、信用金庫の政治的役割を持つ（社）全国信用金庫協会、信用金庫のセントラルバンクとしての役割を持つ信金中央金庫などがある。その他にも系統機関は存在するが、（社）全国信用金庫協会と信金中央金庫が重要であると考え、その他はここで触れないこととする。

#### 、（社）全国信用金庫協会

（社）全国信用金庫協会は信用金庫の健全な発展を図り公共の利益を増進することを目的として設立された。活動は金融政策、金融行政、中小企業施策などに対して、信用金庫の立場からの要望や意見をまとめ、金融庁などの関係機関や国会などに伝えることや信用金庫業界の長期経営計画の策定ならびに金融経済環境や各種調査活動の実施、決算分析等経営資料の作成、全国ネットワークシステム（しんきんふれ愛ネットなど）を通じた情報活動を展開している。

#### 、信金中央金庫

信金中央金は信用金庫の中央金融機関として、信用金庫間の資金需給を調整するほか、信用金庫の余裕資金を運用・還元、信用金庫間の決済業務、信用金庫の業務機能の補完、信用金庫に対する経営相談、経営参考情報の提供を行うなど、信用金庫業界のシンクタンク・コンサルタントとしての役割を果たしている。

また個別の金融機関として、金融サービスの提供、機関投資家としての役割も果たしている。



## 考察

信用金庫が発展してきた理由は、特定の地域内に集中して事業を展開する地域性、地域で最も利用しやすい金融機関としての利便性、地域性から得ることができる情報力、地域社会への貢献から得ることができる信頼性、信用金庫をサポートする系統機関の存在が考えられる。信用金庫の存在意義は、「地域」である。地域のために設立され、地域とともに発展する。都市銀行ではできないことに信用金庫の役割はある。

信用金庫は金融機関であるが、地域社会を支える存在でもある。信用金庫は合い言葉のように「地域貢献」と言っているが、その意味は、信用金庫は地域と運命を共にしているからである。地域経済が好調であれば、信用金庫も好調であるし、逆に不況であれば、信用金庫も厳しい状態になる。地域社会の発展のためにはお金だけではなく、人の力が必要である。そのために信用金庫は地域に貢献し、地域に住んでいる、また地域で働いている人のために貢献するのである。

信用金庫は地域社会に必要な存在であるが、問題もある。その問題を3章で述べることにする。

### 3章 信用金庫の課題（中小企業取引）

信用金庫は中小零細企業と多く取引をしているが、中小企業には中小企業ならではの経営がある。その特徴として、 個人的経営、 生産設備、 下請けなどが考えられる。

個人的経営・・・中小企業の場合、一般的に経営者の個人的能力によって経営されている企業が多い。特に小零細企業であれば家計と経営が分離されていないケースも多くある。

生産設備・・・中小企業は資本が小さいため、大規模な設備の導入や更新などの設備投資の面で大企業より劣っている。

下請け・・・中小企業は大企業に製品を納入したり、大企業から加工を依頼されたり、大企業の製品を販売していたりなど大企業と関わっていることが多い。このような関係の中で、不況期になり、大企業が苦しくなると中小企業は取引の中止や取引の縮小などのしわ寄せを受けることになる。

これらの中小企業の経営の特徴は、貸出する信用金庫にとって取引を困難にする要因となっている。中小企業経営の特徴は大企業と比べ情報が曖昧化している。大企業であればディスクロージャーなど数値として正確な情報を得ることができるが、中小企業の場合であると、特に の特徴から正確な情報を得ることができない。そこで信用金庫は長年の付き合いで情報を得てゆかなければならない。このことは中小企業との取引にはコストがかかってしまう原因につながる。

中小企業との取引には問題がある。しかし、その取引は重要である。平成14年3月、信用金庫貸出状況の残高構成比<sup>8</sup>は、中小企業向けが全体の68.0%、地方公共団体向けが2.1%、個人向けが29.9%となっている。中小企業向けの約7割を占めていることから、信用金庫は取引をしなければ生き残ってゆけないことが分かる。

また、信用金庫やその他金融機関の中小企業向けの貸出の額は年々増加していることが図 で分かる。このことから中小企業との取引の重要性がうかがえる。

---

<sup>8</sup>長野幸彦監修 社団法人全国信用金庫協会編『信用金庫読本 第7版』 2003年 きんざい P265

図 金融機関別中小企業向け貸出金の推移 (単位:億円)

		昭和 29、3 月	36、3	46、3	56、3	平成 3、3	14、3
残高	信用金庫	1,610	7,263	63,380	261,310	565,445	626,273
	都市銀行	4,523	12,915	56,986	331,340	1,265,528	1,416,373
	地方銀行	4,424	12,756	65,586	298,331	772,879	1,031,744
	第二地銀	3,001	9,955	52,665	213,415	379,109	393,222
	合計	13,558	42,889	238,617	1,104,396	2,982,961	3,467,612

(注) 1.個人向け貸出を含む。また、統計方法の変更により、平成 14 年 3 月の数字は当座繰越を含む。

2.中小企業の定義の変更は「日本銀行経済統計月報」に合わせた。

(資料) 長野幸彦監修 社団法人全国信用金庫協会編『信用金庫読本 第 7 版』

2003 年 きんざい P102 図表 8 をもとに作成

## 考察

信用金庫の課題は、貸出の約 7 割を占める中小企業との取引をどのように進めていくかである。中小企業は独特の経営があり、難しい面がある。しかし、ここを簡単にリスクがあるといって貸出をしないということでは、営利組織との違いはない。信用金庫は積極的に貸出することが相互扶助につながり、信用金庫の存在意義である。

例えばリスクの高い中小企業が借入を申し込むとする。それをリスクが高いという理由で断るとする。それが原因でその企業が倒産する。すると信用金庫は今まで集めることができた資金が減少し、さらに融資によって得ることが出来る利子も入らなくなる。

また、その地域では「あの信用金庫に融資を断られた」といった評判がたってしまう可能性がある。狭い地域で活動する信用金庫にとって信頼が損なわれることは致命的である。つまり、融資を積極的にすることが信用金庫へ還元され、利益へとつながる。

では信用金庫の課題を克服するためには、どのように取り組めば良いか。3 章で中小企業取引の問題をあげたが、4 章でどのように取り組めば良いかを述べる。

## 4章 信用金庫の課題

### 1節 中小企業取引への対応

信用金庫は地域の企業と積極的に取引を行うことで自らの発展につながる。中小企業との取引では情報の曖昧化という問題がある。この問題を解決することが必要となっている。

信用金庫の強みとして地域集中型の店舗展開がある。信用金庫の職員がその地域の取引先や家庭を漏れることなく営業するわけであるが、その中では地域のメインバンクとして長い付き合いや地域イベントへの参加などから、地域での信頼を得ている。この信頼を生かした対応が必要である。

中小企業との取引においてはいくつかの段階があると考えられる。

第一段階は、信頼を得ている職員が親身になり、中小企業の金融ニーズをくみとることである。中小企業の経営者が相談できる存在になることが重要である。

第二段階は職員が中小企業へ正確な情報を得ることである。これは企業側の努力も必要となってくる。中小企業の中でも比較的規模の大きいところであれば公認会計士や税理士に相談することができるが、小零細企業であればそれは難しい。信用金庫職員はこの小零細企業との取引であれば公認会計士や税理士の役割を果たしていかなければならない。正確な情報の重要性を認識させ、企業側に用意させることでその後の対策が決まってくる。

第三段階は正確な情報をもとに長期的なプランを作成することである。特に返済計画である。何年かけて返済するのか、その間に必要と考えられる費用などを職員、企業とが話し合いを重ねながら決定していく。ここでは中小企業診断士のような役割が必要とされる。

信用金庫は小零細企業との取引において、人材の育成がこれまで以上に必要になってくる。職員一人一人のスキルアップが中小企業取引に還元されるはずである。

信用金庫では社会のニーズの多様化に対応するために、職員のスキルアップを図っている。具体的には資格取得をサポートする体制になっており、通信教育や専門学校費用の一部を負担する。資格の内容は中小企業診断士、社会保険労務士、ファイナンシャルプランナー、簿記など様々である。資格を取得すると給料に資格手当が付き、職員の資格取得意欲へとつながっている。

これらの努力をし、積極的に取引をすることが理想的である。逆に信用金庫が中小企業との取引に消極的であると信用金庫の信用はなくなってしまう。そこで多摩中央信用金庫の例を挙げる。

「01年に理事長に就任した佐藤が背負った経営課題は融資量の減少をくい止めること。そのために、まず中小企業経営者の話を聞くことから始めた。たましんの本・支店48店

舗が抱える主要な取引先は約700社。4ヶ月を費やして全社を訪問した。経営者たちの苦勞は、佐藤の予想をはるかに超えていた。その多くは自力で不況を乗り切ろうとしていた。貸し渋り、貸しはがしの荒波にさらされ、金融機関に対する不信感を募らせていた。たましんも、大手銀行と変わらなかった。自己資本比率を気にして、不良債権になるかもしれない危険な融資をさけていた。「銀行はどこも一緒だ」。経営者は冷め切っていた。「たましんもおしまいか……」と、佐藤は恐怖感さえ覚えた。佐藤は、顧客回りを続けながら、30年前のように「たましんと自分の仕事の意味」を問い返していた。」<sup>9</sup>

取引に消極的であったために信用は失われ、信用金庫の特徴を發揮することができなかった例である。結果として、経営者は自力で頑張ろうとしたことで、信用金庫は融資量の減少という事態を招いてしまった。

中小企業白書の中小企業の再生と金融<sup>10</sup>によると、メインバンクから思い通りに貸してもらえなかった企業の割合は、債務超過企業のうち、計画の具体性が高い企業は44.2%であるのに対し、計画の具体性が低い企業の割合は52.0%である。銀行や信用金庫側は計画性が高い企業に対して貸出をする傾向がある。

信用金庫の貸出の姿勢と企業側の姿勢が前向きにならなければ共倒れになってしまう。そのところをお互いが深く認識した上で、共に発展できるような姿勢や努力が必要となる。

## 2節 情報の仲介・活用

信用金庫は強みを持っている。その強みを高めることで弱みをカバーすることができる。。ここでは情報という強みを有効活用する必要性を述べる。

信用金庫には地域情報があり、その情報を地域へ役立てることができる。ここで朝日新聞にあった多摩中央信用金庫の記事を例とする。多摩中央信用金庫業務部主任調査役・長島剛氏の体験がもととなっている。

「理事長・佐藤浩二の就任で始まった経営の大転換は、ようやく軌道に乗りつつある。一方で新たな課題も見えてきた。中小企業の情報収集力をどう高めるかもその一つだ。近くで製造されている材料を、わざわざ遠方から取り寄せている経営者もいた。長島らが始め

<sup>9</sup> 朝日新聞社『朝日新聞 多摩13版』 2005年1月19日

<sup>10</sup> 中小企業庁『中小企業白書』 2004年度版

たのは企業同士を結びつける試みだ。」<sup>11</sup>

信用金庫が仲介となり、企業同士を結び付けている例である。これにより地域内で調達、生産できるようになり、地域の中で循環する。

情報の有効活用は企業同士を引き合わせるだけではない。地域社会においては地域住民、企業、自治体、学校などが共存している。信用金庫の持っている情報力を地域社会へ還元し、地域社会が一丸となって発展することが望ましい。信用金庫は、強みである情報力を最大限に生かせるシステムを構築する必要がある。

そのためには地域の情報管理を徹底することが必要となる。地域の情報管理は既存の取引先の中小企業や個人において直接の担当職員、もしくは、その職員の支店は情報管理が行われているようであるが、それを信用金庫全体で取り組むことで新規の顧客獲得や既存の顧客のニーズに応えていくことが可能となる。信用金庫の本店を軸に情報のネットワークを構築し支店同士がそれぞれの顧客の情報を共有し、企業同士や個人の結びつきの手助けをすることが可能である。信用金庫は現在まで地域密着の事業を行い、情報をかなり持っているはずである。

## 考察

信用金庫の課題への対応として、中小企業との取引の姿勢、情報の仲介・活用というものをあげた。これを達成していくことが可能であれば、地域社会と信用金庫は共に発展できる。中小企業との取引では信用金庫と企業とを、情報の仲介・活用では企業と企業、企業と個人、個人と個人とを結び付けることである。信用金庫のかれからは、いかにこの「結び付き」を強くすることができるかによって決まってくる。

おわりに、で本論文のテーマである信用金庫の存在意義、地域社会・地域経済の役割をまとめることとする。

---

<sup>11</sup> 朝日新聞社『朝日新聞 多摩13版』 2005年1月22日

## おわりに

信用金庫は地域社会・地域経済の発展のため、協同組織という形態により、中小企業や勤労者などの社会的弱者のために資金を供給し、地域を支えることが存在意義であると主張してきた。そのためには、地域のイベントへの参加や清掃活動などの地域貢献が必要であるし、地域金融機関として地域住民の最も身近な存在で、利便性があるものでなければならない。これらの理由で信用金庫は地域社会にとって必要な存在である。

現在は金融の自由化による金融機関の競争や合併、企業の倒産、グローバル化による外資の攻勢など信用金庫を取り巻く環境は厳しい。しかし、やれることを徹底的にやり、長所を生かし、信用金庫の経営資源を選択・集中することで信用金庫には信用金庫独自の戦略を展開し、競争に勝ち残っていける。

本論文を進めていく中で、私は、「信用金庫の役割」というものは、上記以外にもあることに気が付いた。

「人と人とのつながりを作り出していく役割」。これが信用金庫の根底にある役割であると考える。

地域社会は「人」により形成され、「人」のために運営される。「人」が、より豊かな生活を営むために協働し組織が形成される。自治体・企業・学校などとなる訳であるが、その中で信用金庫は、「お金」という地域社会で共通に通用するコミュニケーションの手段を有している。だからこそ地域社会にとって必要な存在である。「お金」という手段を利用し、人と人とを結び付け、豊かな地域社会を形成することが、信用金庫の最大の役割であると私は考える。取引による信用金庫の職員と企業の間、個人とのつながり、イベントや地域貢献活動による信用金庫の職員と地域住民、地域住民同士のつながり、信用金庫の情報力の活用による企業の間同士のつながりなど、無数のつながりを信用金庫は作り出すことができる。

信用金庫が「人」と「人」とのつながりを増加させることが、より豊かな地域社会の形成につながるはずである。そこに信用金庫の真の役割がある。

#### 参考文献

- ・ 楠本博著 『信用金庫の時代』 1995年 株式会社近代セールス社
- ・ 宮田慎一著 『城南信金・笑いのとまらぬ経営術』 1995年 エール出版社
- ・ 須田慎一郎著 『銀行大激突』 2004年 光文社
- ・ 家森信善著 『地域金融システムの危機と中小企業金融』 2004年 千倉書房
- ・ 長野幸彦監修 社団法人全国信用金庫協会編 『信用金庫読本 第7版』  
2003年 きんざい

#### 雑誌・新聞

- ・ リクルート 『就職ジャーナル 金融ビジネス読本』 2004年2月8日
- ・ 朝日新聞社 『朝日新聞 多摩13版』 2005年1月19日  
2005年1月21日

#### URL

- ・ 中小企業白書 <http://www.chusho.meti.go.jp/hakusyo/>
- ・ 信金中央金庫 <http://www.shinkin-central-bank.jp/>
- ・ 信金中金総合研究所 <http://www.scbri.jp/>
- ・ (社)全国信用金庫協会 <http://www.shinkin.org/>
- ・ 金融庁 <http://www.fsa.go.jp/>



## 補論

信用金庫の役割で最も重要なことは、「人」と「人」を結びつける役割であるとういことについて補足する。

「信用金庫の役割」を書くにあたり、信用金庫の採用の面接で言われた言葉が、本論文のヒントとなっていた。その言葉とは、「信用金庫の職員は人柄が重要だ。」というものであった。この言葉を聞き、信用金庫以外でも銀行や金融以外のサービス業、販売業であれば人柄が重要であるのではと考えた。

この言葉は、信用金庫は人と接することが他の業種と比べて多いことをふまえてのことであると考えられる。サービス業や販売業であれば、例えば、飲食店。ここでは客が食事をしている時間のみ接する。常連客でない限り、そう何度も接することはない。販売業であれば客が買い物をする時だけである。銀行では顧客との取引で、比較的長い時間接することになる。信用金庫の場合は銀行と同様の顧客との取引以外に地域イベントへの参加などの、本来の業務以外で人と接することがある。他の業種と比べて人と接する時間が多いことが信用金庫の職員は人柄が重要と言われるゆえんであると考えられる。

次に、現在の社会事情を考える。

現在の社会の問題として、人口の都市集中化がある。地方では人が都市へ流出している訳であるが、都市部ではニュータウンなどに地方やその土地に代々住んでいない人々が集まる。そこから新たにコミュニティが形成される。以前の日本のコミュニティは「近所付き合い」が盛んであったが、現在のニュータウンではその意識は薄れてきている。それは、あまり面識のない人同士が集まっているからである。「近所付き合い」とは相互扶助的で、地域の力である。ニュータウンでは地域の力が発揮されない。最近ではコミュニティビジネスの重要性が取り上げられているが、コミュニティビジネスを始めるには、立ち上がるのはそこに住んでいる人間であり、その人間が問題提起し、声をかけ、人を集め、行動に移すということは、なかなか大変な作業である。そこには希薄な近所との関係があるからである。しかし、コミュニティビジネスが成功すれば、地域が抱える様々な生活の課題への対応力を付けることが出来るようになる。

今後はコミュニティビジネスの重要性は、いっそう高まると考えられる。

ここで、信用金庫の役割が、「人」と「人」を結びつける役割であるということ、信用金庫の職員の人柄の重要性とコミュニティビジネスの可能性を対応させて考える。

信用金庫職員は地域住民と接する機会が多く、接する時間は長い。そこで人柄が重要であり、良い人柄であれば人々から親しまれ、信頼される。それは信用金庫の本来の業務である取引という形で還元されるだけでなく、信用金庫を中心としたコミュニティの形成と

いう形でも還元される。

一方、コミュニティビジネスは地域のつながりを必要としている。そこで信用金庫を中心としたコミュニティが力を発揮すれば、地域はつながりを持つことが出来る。ここで実際につながりを持たせる信用金庫職員が重要であり、人柄も重要となってくる。

本論文の「信用金庫の役割」で述べた、「人」と「人」をつなぐ役割とは、普段から地域を回っている信用金庫の職員の役割である。そのために人柄を重要とされている。信用金庫の役割は、つながりの「場」を設けることであり、本来の「人」と「人」をつなぐ役割を担っているのは信用金庫の職員である。このことを本論文の補論とする。